

唐丹の民話・14話「片川地区」

みすぼらしい



平成19年3月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

## 目 次

### —みすぼらしい坊さんと鮭川の石—

|                    |   |
|--------------------|---|
| 唐丹民話の再話著作にあたって     | 2 |
| 1. かくも親切な唐丹の人たち    | 4 |
| 2. 不親切な人たちのその果ては   | 4 |
| 3. 親切心が、津軽石の人たちを救う | 5 |
| 4. 古老たちは語る         | 5 |
| 5. 片岸川の近況 (参考)     | 6 |
| (1) 沖獲りの禁止         |   |
| (2) 沿岸漁の状況は        |   |
| (3) 片岸川の漁獲量は       |   |
| (4) 鮭の供養をした唐丹の人たち  |   |

## 唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関りかつ再話できるものを選び、その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」「読みやすく」「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入し、できるだけ関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの「民話を伝承したい」と言うこの熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「みすぼらしい坊さんと鮭川の石」は、釜石民話第1集「鮭川のいし」を再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

晩秋のころ、きたない衣を着た旅のお坊さんが、唐丹の片岸川に立ち寄りしました。ちょうど夕方なので、川原で火をたいて鮭汁を煮ていたのも、お坊さんの旅の疲れをねぎらい「温かい鮭汁」をご馳走してやりました。旅のお坊さんは大変喜び、おいさを述べて、夕暮れに北のほうをめざして行ってしまいました。

日も暮れてしまいましたので、お坊さんは納屋に立ち寄って火にあててもらいましたが、きたない衣のお坊さんなので、村人は寄りつきもしないし、大鍋にはさけ汁が「ゴトゴト」と音をたてて煮いえきっていましたが、一椀も御馳走しませんでした。

ここの部落は、以前から鮭がたくさんとれるので、お坊さんは、帰り道その部落の鮭川から小石を、三個拾って、また、旅を続け津軽石につきました。

その頃の津軽石川は浅い川で少量の鮭がのぼるだけでした。

お坊さんは、寒いので漁家をお願いして火にあててもらいました。すると、若い漁師さんが「サウーサウー、あついうちに」と、鮭汁を御馳走してくれま

した。お坊さんは若い漁師さんの行為に感謝して、前の部落で拾ってきた三個の小石を浅い津軽石川に「ポンポン」となげいれました。それからは、津軽石川に鮭がのぼるようになったということです。

片岸川のさけは、津軽石川の鮭の違いは、歯の色がくろいそうです。

おわり

## みすぼらしい坊さんと鮭川の石

### 1. かくも親切な唐丹の人たち

昔々、今の片岸川は片瀬川と言われ、それに架かる橋は御手洗橋と呼ばれていました。さらにその昔の秋も終わりごろの夕方のことです。



唐丹の片岸川の川原で、何人かの村人が鮭汁を、煮ていたところへ、そこにみすぼらしい衣を着たお坊さんが通りかかりました。

村人達はお坊さんを見て疲れている様子を感じ、焚き火の周りに呼び寄せ、「どうぞ、どうぞ」と温かい鮭汁をご馳走しました。

お坊さんは、おいしそうに鮭汁をたいらげ、満足そうに手を合わせ会釈すると、夕暮れ間近の道を北の方へと歩いて行きました。

### 2. 不親切人たちのその果ては

北を目指して旅していたお坊さんは、ある村にさしかかった頃には、日も落ち辺りは、薄暗くなってしまいました。

明かりの漏れる納屋を覗いて見ると中では、村人達が火を炊いて大きな鍋で鮭汁を「ゴト、ゴト」と音を立てて煮ていました。

お坊さんは「火に当てて下され」と頼みました。

その声に気づいた村人達は、みすぼらしい衣を着た坊さんを見ると、火にあてるのも迷惑そうに、誰も寄り付きもせず、「火に当たりなさい」とも鮭汁を勧める人もいませんでした。

その様子を見た坊さんは「お邪魔した」と言うと、手を合わせ会釈して納屋を出ました。

この村の川には、昔から鮭がたくさんあがる(遡上する)ので、村人たちは、大変と恵まれていました。

お坊さんは、その川から小石を三個拾うと大事そうに頭陀袋ずだぶくろに入れ、この村を後にし、又旅を続けました。



### 3. 親切心が、津軽石の人たちを救う

幾日が過ぎ津軽石川にたどり着いたお坊さんは、寒いので近くの一軒の家を訪ねました。

家の中では、若い漁師さんが夕食の支度をしていました。

この漁師さんは、お坊さんを見ると「どうぞ、どうぞ」と炉端に招き入れ薪をつぎ足すと「さあーさあー、熱いうちにどうぞ」と炊き立ての鮭汁をご馳走してくれました。



その頃の津軽石川は、浅い川で少しの鮭があがるだけでした。

お坊さんは、若い漁師さんの行いに感心し、この漁師さんにお礼を言い、別れを告げて津軽石川に行きました。

そこで、さっき拾ってきた三個の小石を頭陀袋から出し、川に「ポン、ポン、ポン」と投げ入れると、手を合わせ会釈して、何処ともなく立ち去りました。

それからは、不思議と津軽石川に鮭が多くあがるようになったということです。

### 4. 古老たちは語る

前の隣村の川では、沢山獲れた鮭は、その後あまりあがらなくなったということです。

その村の古老たちは、昔、人に親切にしなかったから、罰があたったんだと。人には親切にするもんだと語っているそうです。      どんとはれ

## 5. 片岸川の近況（参考）

### （1）沖獲りの禁止

鮭や鱒は、北洋などの外洋でも流網や延縄により沖獲りしてきましたが、産卵のため母川に戻ってくる習性、遡河性魚種の観点から、沖獲りは、母川国が管轄権を行使すべきとの母川国主義の国際的合意により、1992年（平成4年）以降その操業は、全面停止。これにともないわが国の北洋での鮭・鱒漁業の長い歴史に終止符がうたれました。

### （2）沿岸漁の状況は

定置網などによる沿岸域の鮭や鱒の漁獲は、沖獲りの禁止や、孵化放流技術の向上により増えて漁村に活気をもたらしてきました。

しかし、輸入や生産過剰や値下がりなどの問題もあります。が、これらの事は、その時々<sup>そ</sup>の経済状況や自然環境の変化に左右されるものであり、避けて通れない宿命ではないでしょうか……。

### （3）片岸川の漁獲量は

今の片岸川には、毎年5万匹くらいの鮭があがっています。

その鮭より3千5百万個くらい採卵して、人口孵化させていますが、孵化の間に5百万匹くらいは死んでしまうそうです。

3千万匹くらいを放流し、その戻ってくる鮭のお陰で、唐丹漁協の定置網の漁獲量は、県下でも上位にあると言われています。



（片岸川へ遡上する鮭の群れ・平成18年11月 撮影）

#### (4) 鮭の供養をした唐丹の人たち

大昔から変わらぬ唐丹の親切な人たちは、鮭がはるばる母なる川へようやく帰ってきて、生涯を全うしようとした寸前に、人々のために儂く散った生命の鎮魂と人々の生活を支えてくれたことに感謝しつつ、片岸川の清流を背に、第3孵化場を前方にした所へ、鮭の供養塔を建て供養しました。



(鮭供養塔)



(第3孵化場)

その供養塔の碑文は、つぎのとおりです。

この供養塔は唐丹地域の人々の生きるための生活源とはいえ鮭本来の目的である自然の産卵を達せず敢え無く尊い生命を失った多くの鮭の鎮魂のために建立するものである。

この片岸川の清流に自己の生命の源泉を求めて北の海から本能的に母川を慕え続けての長旅。

産卵という鮭の生涯にとって最大にして最後の使命を果たすべく、幾多の困難と障害を乗り越えて漸く辿り着いた母なる片岸川。

そこに待ちうけていたのはさけの自然産卵を阻む人間の手による捕獲と人口採卵孵化であった。

人類が生きる手段として生み出した方法であるが、鮭のにとっては真に憐れである。

この自己の崇高な営みを半ばにして生命を絶った数多くの鮭の魂に心から弔慰をもって安眠を祈るものである。

而して鮭の繁殖と資源保護を図るためには将来に亘り更に一層、人口孵化事業を推進すべきであるが自然の環境を守り、あらゆる面で適正を欠くことなく、しかもこれに携る人間が誠心と愛情をもつことが肝要であり、天与の恵みが永く福音を齎らし地域漁業の振興と経済発展に貢献することを期待し鮭供養に深甚の誠を捧げるものである。

1981年3月27日建立

(参考)の項、おしまい



◎釜石の民話・第2集：鮭川の石

○話し手：尾形伝五郎さん／川目

○聴き手：加藤ムツさん／片岸

●再話著者：上村年恵／片川地区（唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影者：上村年恵／同上

：新沼裕／本郷地区（唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●校正指導者：新沼裕／同上

●再話完成：平成19年3月